

911.32
オ

かみのかき



東京 寶晉齋永機首書
浪花 安の九家貞英校合

かぐのふとん

晋其角筆

其角堂藏版

徳東山人

かぐのふとん



吉後集
丈六地巻
万物之因
旅多歴
百代之
色客

吟行
吟行
吟行

月日百代の色客をてゆきうあやも又
旅人せあううよ生涯却ううのる乃口
とくして老をむふる物わらく旅みて
旅を極とんちんも多く旅よ死せる
ありやうもいつれのまゝありう斤をり
風よらやわらうて漂却の思いややん
海濱よらやうて去るの秋江上の破
屋よ棟のあるはを拂らしててとやも

藍園の
言のけし
村田の
あつた
あつた
あつた

新加坡
移教
心
招
招
招

くれまをまを海を船のまを白川の園
んをろり舟のおをうをうを心
せを祖神のまを心であらてを
まをうをまをいをまを破れを
まの船をうを三をまをを
松をの舟を心をうをうを
人まをうを松をうををを福を
まのまをうをうをまをのま
可りていもまを庵の船をうを

ゆをまを末の七日のまをの
しをうをうをうをうをうを
物をうをうのをまをうをうを
中をうをの物まをうをうを
あをうをうをうをうをうを
まをのうをうをうをうをうを
あをうをうをうをうをうを
胸まをうをうをうをうをうを
まをうを

今もその
名をた
くしの
くしの
くしの
くしの
くしの

めりつと多くわつれはるぬそよふ
ふし風やうてるる蕪輪をよめ
すもこのあまをききよめ

笠吹からつこさりのをうりた

松のま
松のま
松のま
松のま
松のま
松のま
松のま
松のま
松のま
松のま

岩渚のやとふ曲隈の松ありて目さ
ちる心せすれ根を全防より二本は
りして昔のすしこしあつたまをさる
先能因法一わりのむは音陸奥守
まをうりし人まあな伐て名をうり川

本我
任の
早の
各の
格の
格の
格の
格の
格の
格の

本白
成の
成の
成の
成の
成の
成の
成の
成の
成の

の格抗させられし屋にありてあはれを
まや松らばしといはれしといはれし
休にあるはありしに松つてありし
とよのよとよのよとよのよとよのよ
のてしや松のしやまありし
本隈の松をこやと備はらるる本白
とよのよとよのよとよのよとよのよ
揚より松に二本をこよのよ
各取川海よりては巻み入あはれし日

塔宮の如くは諸國守再興を以て
 之を以てしるは新搦すしるは
 石の階九段よりはありおの年
 玉璽を新んじりておのの
 境まで神意ありてにすし
 吾人の風俗を北より南に
 ありて宝塔のありて面
 文治三年和泉三郎寄進と云五百
 年以來の所と目するはありて

七言の節
 扁邊
 の標我
 名又從之

湘江
 是らも政一は勇義忠孝の
 士也佳名とありて志すは
 ありて識人然るはありて
 を字くは石も又さるはありて
 日既午子也一舟をりて松遊る
 甚るるに余餘一もの強ありて
 るありて松遊るは松遊る一
 好むありては旧をありて
 東南よりありては中一とありて

こじん
大岩川中
大岩川中

わつこ川ハみちのくまらあてし山形をこ
こじん
新水の板まの山を流してはてわ
酒田のゆふ入たふ山層ふとふと
中しあ無そふん是まのひとふと
やふあ舟といふふし白糸の流を
まふあふひまつくみあて仙人堂山
ふ流て立水流て舟あり
五月あをとあつのはなふん

大岩川中

匡承堂
一印の
表書き
傳授す
四
林山坊
林山坊

六廿三日羽黒山ふのらる園司た
とらふののをらるてあふん舎
阿闍舎る湯又南谷のふ院ふ舎
憐愍の情こあふふあせし
か新やあをさうふふとあ
五日摧現る宿あゆ山用園能除大師の
うまの代の人とあふとあふと
喜ぶふ羽列里山の神社とあふと書字
黒のふを里山とあふとあふと羽列

里山を中略 三羽黒山とらうま
あゆまらうと鳥の毛羽をけあの
貢子歌のよを記し侍とせん
月山湯殿を合てとてたきり
あはま殿子屬七天台とて
月山とらうま内吹敷のたみ
しりしりして侍持杖をかへ
新法をたしやま 素子無びり
郊く書りうまのむすも

あはまのむすも
いふ月少のりりの本海とあま
つ中宝冠のむすも包強力とら
あはまのむすも山氣のむす
あはまのむすも山氣のむす
日月のむすも山氣のむす
月歌のむすも山氣のむす
あはまのむすも山氣のむす

れをさしつゝよもゆきとさしむ
んをのくしの馬場ふ大勢のちくは
くそははあやちのくそ國をさ
不保のさしむのさしむのさし
あましむのさしむのさしむ
ひのさしむのさしむのさしむ
ゆきさしむのさしむのさしむ
つゝさしむのさしむのさしむ

一家はお女もおの薪を月

曾られあひさしむのさしむ
くろく四十の歳とやなむさしむ
了りてさしむのさしむのさしむ
治はまのさしむのさしむのさしむ
へあひのさしむのさしむのさしむ
里さしむのさしむのさしむのさしむ
さのさしむのさしむのさしむのさしむ
ら痛のさしむのさしむのさしむのさしむ
すれてあひのさしむのさしむのさしむ

おもひしき目老らるるを引きて
 若年のちりし金のちりしを白鹿
 實 後形おしよるを皆死の良本
 善中一羽翫ましては社に
 侍し 柳の坊の使し
 るを皆の良しを記よる
 おこしお甲のりめたる
 ちりしちりしと白根のけり
 ことししよるたのちりし
 記

花山院 唐平 十九年 伊勢守
 堂あり花山法皇三十九年の元
斑谷の 善寺院
 下ありて大連大との像を
わら
 一ありて那谷と名をありし
わら
 那智谷組のころをわらし
 奇石にえしよる古松ありし
 菅ありしよる堂のころをわら
 お柳の生也

石山集 白凡 平 有馬
 石山の石よりし
 温泉子路に其切有ゆよ

所より此の宗をさしに思ひしる
ありしもておれぬ作をさるる
と陳あねのてい

おらうと高りはくはあは

元 五十河のつみ入て永平寺を祀す道
禪師の所より(邦持)千里を離て
うは山陰子詔をうじし所を費
中ゆりしる

福井ハ三里平あねを夕殿志し

全載ハ
連名
御名
と

あまのつみ入て永平寺を祀す道
禪師の所より(邦持)千里を離て
うは山陰子詔をうじし所を費
中ゆりしる
あまのつみ入て永平寺を祀す道
禪師の所より(邦持)千里を離て
うは山陰子詔をうじし所を費
中ゆりしる



梵網のし刺血を為す也打骨を爲す
 此の字の仙命の指地慶用止觀
 子のあはれ排祖佛をてし
 ありしに
 二百字の思のし
 筆記一字のし
 先代

明治十七年九月其角堂編輯書目

晋永機

其角堂編輯書目	
總文八百款	四冊
教句五百題	四冊
新花摘	二冊
俳諧升る草	二冊
同 目之流卷 <small>成合集</small>	二冊
教類三頁集 <small>池到</small>	二冊
俳諧抄	一冊

明治十八年二月九日出版
三月出版

出版人

發兌

晋永機

有馬師邦小梅村幸里花

松崎半造

教本堂都留乃

